

怪人ハンター アイズ

大熊狸喜

表紙イラスト：ひななくま



二次元ぷち文庫

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『怪人ハンターリン』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



怪人ハンター アイズ

大熊狸喜

表紙／ひなくま

登場人物紹介

Characters

みやしろ

宮代リオン

生体兵器ヘラクレスで変身して怪人を倒す。バーンに恋心を抱いている。

みやしろ

宮代バーン

リオンの義兄。カブトムシ怪人に変身し、怪人たちの本部を滅ぼした。

クワガタムシ怪人

生き残った怪人たちのリーダー。リオンを罠にはめ、怪人たちの子供を妊娠させようと企む。

土曜日の夜は街の空気そのものが華やいで感じられる。それが繁華街なら尚更で、街は休日前夜を楽しむ人々の安らぎと開放感とで活気づいているものだ。

そんな人々が美しい満月を見上げる事はあつても、ビルの屋上に注意する事はなく、そして明るい看板に隠された暗い屋上では確かな異変が起こっていた。

「いやああつ！ だつ誰か助け——ぎいつひやぐあああつつ！」

地上の光が届かない湿った屋上で、会社帰りらしい一人の女が犯されている。恋人の為に着飾った衣服は無惨に引き裂かれ、布の間からは形のよい乳房や発達したお尻が剥き出しにされていた。

傍らには布きれと化した男性物の衣服が、血痕と共に散らばっていて、肝心の肉体は見あたらない。男はある怪異に命を奪われ、更にその肉体を一片残らず食べられてしまったのだ。

そして男を殺し食べて、女を組み伏せ襲う暴力は、人間の姿をしていなかった。

グビヤガカカッ！

籠もるような低い声で鳴く異形の生命体。それは二本脚で立ち上がった鱈わにのような姿をしている。成人男性を一飲みしそうな巨大なアゴと、筋肉盛り上がる人間のような手足を持ち、人間と同じ掌には鋭い爪が生えていた。

怪異の頭部には赤い目が四つあり、額には生体反応を表すような赤いクリスタルが、鼓

動に合わせて輝いている。全身は硬そうな鱗に覆われていて、長い尻尾まで合わせると、全長はゆうに四メートルを超えるだろう。怪物は女の尻を背後から掴み、怒張した勃起を女孔に押し込んで強姦をしていた。

鰐の怪力で肉体を前後させられて、恋人を喰い殺された女は息も絶え絶えの肉体陵辱に晒されている。既に幾度かの強姦と射精をされているのか、揺れる乳房や締まったお腹、艶めく尻肌には粘性の高い白濁液が粘り着いていた。

そして怪物の喉から発せられる、くぐもった人間の言葉。

「オンナ、オンナ：オンナオンナオンナアアッ！」

人語を話しながら、人間の女性を陵辱する鰐の怪物。これはどう見ても自然界に生息する生物ではない。

数回の射精を堪能し、更に快楽を貪ろうと女体を犯す怪異。そんな、月明かりのみに照らされる陵辱の屋上に、一つの影が現れた。

凄惨な場には到底似合わないであろう、清純な少女の声が涼しく響く。

「あなたはもう、罪を犯してしまったのですね……」

背後から聞こえた悲しげな声に、鰐の怪物は女性を犯しながら振り返る。怪異の視線に映ったのは、制服姿の学校帰りらしい、カバンを下げた一人の小柄な少女だった。

その少女、宮代リインのセミロング黒髪が風に靡く。

丸いラインの小顔には大きなタレ目が優しげに目立ち、通った鼻筋と小さな唇は少女の愛顔を幼く清楚に感じさせた。百五十センチに満たない身長は、赤いリボンを着けた白いワイシャツと袖なしセーターという、極普通の女子学生らしい制服に包まれている。

小さな身体は起伏も少なく、高等部制服胸部の校章がなければ、中等部どころか初等科上級の生徒にすら見えてしまうだろう。

ミニサイズのスカートからは、肉は少ないが健康的な艶を魅せる腿が、清楚にスラリと伸びていた。

怪物を前に動じない黒髪少女は、自身の倍以上もある鱈怪人に向かって歩を進める。陵辱される女性と傍らに捨てられた男性の衣服を悲しく見つめると、鋭く引き締めた瞳を惨殺者に向けた。

「罪を犯していなければ、見逃して上げましたけれど……」

如何にも非力といった女学生が、身一つで近付いてくる。小柄な少女を更なる獲物と感じた鱈怪人は、陵辱され続けて気絶した女を捨てると、新たな獲物に大口を向けた。

グガカカカツ、ガシヤカアアツ！

鱈怪人の眼光は赤く濁り、邪な喜びに支配されている。今まで女体を犯していたペニスは淫液に濡れて光り、更に強く勃起を反らせていた。

悲しそうな決意を瞳に宿らせると、カバンに下げられたカブトムシのヌイグルミに声を

掛けるリイン。

「いきましよう、ヘラクレス」

少女の声に反応して、ヌイグルミからカブトムシが飛び出す。一見ヘラクレスオオカブトにも見えるその甲虫は、複数の目と長い尻尾を持っていて、その姿はどう見ても鱈怪人同様、自然界の生命体ではなかった。

カブトムシが角を輝かせてリインに光を当てると、少女の腹部には有機的な太いベルトが巻かれる。ベルトの中心には大きな丸いクリスタルが詰め込まれていて、黒髪の小柄少女は怪物を見据えながら声を発した。

「装身っ！」

その瞬間、ベルトのクリスタルが青く輝き、少女の身体に変化が起こった。

ピカアッ、キラキラキラ……っ!!

ベルトから発した光が粒子になって、頭部全体と腕部、脚部を覆う。眩い光が収まると、制服少女の身体は生体鎧に覆われていた。目の前で起こった変化に、一瞬戸惑う鱈怪人。

少女が変身するということだけでも有り得ない異質なのに、その姿は更に異質だった。

学校の制服に身を包んだリインの頭部は、鎧のようなヘルメットに覆われている。かなりサイズが大きく見えるその仮面は、二つの大きな青い目とカブトムシのような角を生やして、生物的な艶を見せていた。

白くて細い首には少女の鬪志を表すように、真つ赤なマフラーが翻る。仮面の後ろからはセミロングの黒髪が靡いていて、覗ける口許にはサクラランボのような、艶めく唇が小さく引き締められていた。

少女の両腕はやはり甲虫のような太い鎧のグローブを着けていて、更に両脚にも大きめで甲虫的な鎧を纏っている。制服の腹部に巻かれた生物的な太いベルトの中心部では、青いクリスタルが生命核として輝いている。

更に変身少女の掌には、巨大な銃型の剣となったカブトムシが握られていた。甲虫の腹部にグリップが付いて、刃と化した長い角の根本には大きな砲口が開いている。

姿を変えた少女のそれは、変身というより手軽なライトコスプレといった感じだ。

「……あなたを、斬ります…っ！」

普通のブレザーの上に、生体的なヘルメットとグローブ、ブーツとベルトを着けたコスプレ少女は怪異に向かつて、人間を超えたスピードで接近する。ラインの纏った生体鎧は少女自身の肉体をも、一時的に強化していた。

疾走に合わせて黒い髪や赤いマフラー、短いスカートがヒラリと流れて捲れる。

鱗怪人も大きな身体の向きを変えて、獲物を捕らえようと走り来る。重い身体を見た目以上の筋力で走らせ、自動車なみの速度で仮面少女に迫った。

怪人の邪眼は既に理性を失い、大アゴからは涎を垂らし、その有様はただ女の肉体を求

マツチ棒よりも細い異物の感触で、意識を集中させられた媚肛が更に突っつかれると、予想以上の恥ずかしさと衝撃を感じさせられてしまう。軽い突っつきなのに肛門から背筋までがジキリリッと熱甘電をさせられて、思わず息が跳ねさせられる。

突かれ収縮する少女媚肛の恥姿を楽しんだ蚊人間は、更に自身の欲求を女体に課す。リンは媚肛に針口を押し当てられると、そのまま押し込まれる感覚を覚えさせられた。

「ひゃううっ——ま、まさか……！」

嫌な予感が脳裏を過ぎり、そして予感はずいぶん怪人の言葉で的中と教えられる。

「女の身体を淫葉漬けにするには、浣腸が一番ってモンだぞえ」

「か、浣ちよ——そんなのいや——んんっ……あふう、くう……っ！」

公開浣腸という恥辱行為に、脳裏が混乱させられて追い詰められた。しかし次の瞬間には熱を帯びた蚊怪人の針口が、強い力でゆっくりと押し込み込まれてしまう。

……っぶぶ……ちゅぶっぶぶきゅ……。

「やめて……おしりい、おなか……あは、はあふ……！」

マツチよりも細かった怪針口は押し込められるに従って太さを増し、腸の奥まで差し込まれる頃にはスリコギ以上の太さになっていた。十数センチにも満たない押し込みなのに、お腹の中は詰め物をされたみたいに息苦しく感じられる。

敵怪人に半裸に剥かれ、恥辱の浣腸をされる小柄な黒髪の正義少女。更に異物を挟ま

れた肛門は条件反射をさせられて、リインは強い排泄欲を覚えさせられ始めた。

(こ、この…感じは…)

自らの強い排泄欲求に責められて、更に脳裏が羞恥責めに灼かれる。

健気な肛門括約筋が押し込まれた針口を排泄の力で締めつけると、キツイ感触までもが変態モスキートに楽しまれてしまう。

「キュウキュウと締めてやがるなあ、コレだから女の肛門は堪えないぜえ」

「いや…：恥ずかしひ…」

肛門の感想を聞かされて、年頃の少女は今にも隠れたい程の羞恥に晒される。幼い愛顔は耳まで真っ赤に染まり、黒髪から覗ける項や細い背中まで恥ずかしさに上気していた。

羞恥に震える小さなお尻。シワを伸ばされた赤い肛門は更なる淫辱に晒される。肛姦される腸内に、正義の少女は熱い液体を注入され始めたのだ。

——チヨロロ：ヂュピユウウウウツ！

「いいつ、熱いっ——なにか、あついっ！」

腸内で感じさせられる熱液体の感覚。肛門付近から更に奥、凶鑑でしか知らない場所へと、一方的に熱が染み込まされてゆく。

体内を浸食されるような恐怖に、浣腸責めにされる少女の脳裏が更に混乱させられた。

「女の肉体全てを過敏な性感帯に染め変える、催淫浣腸液さあ」

「さ、催淫、浣腸液ですって…!？」

名前だけでも恐怖を呼び起こさせられる液体。驚愕する獲物に対し、怪異は更に言葉を続ける。

「コイツは効くぜえー。全身の神経から脳神経までが侵されて、セックス以外もう何も考えられなくなっちゃう。腸内から身体に染み込むから、どうあっても防ぐ事はできないしなああ」

「そ、そんな…はあうう…!？」

そんな物を注入されてしまったら、もう人々を護るところか、怪人たちの性のオモチャとして弄ばれ続けるだけの身体にされてしまう。

悩乱少女に興奮するモスキートは、更に大量の催淫浣腸液を腸内へと注入する。

「お前は特に、タアツプリとサーピスしてあげるぜえ、ケケツケケ」

「そんなのヤあつ——あは、かふう…!？」

ツヂユビユツビユウウウウウウツツ!

大量の液体を流し込まれる少女の腸。異常な淫液を注入されて、細い下腹部が内側から膨らまされてゆく。

「見る見る、孕み女みたくなってきたぞお」

「や、やめ…て…おなか、くるひ…!？」

幼女のような小柄少女のお腹が、不釣りあいな程の膨らみを持たされる。

妊婦のような腹ポテ姿にされた浣腸少女戦士は、未経験の重い苦痛で意識がグラグラと揺すられてしまう。蚊人間の細い口で腸内をかき回されると、お腹全体が重く振り回されるような鈍痛を感じさせられる。

異質な感覚で秘処が窄み、濡れ透ける下着が柔肉に挟まれて、純白下着はクツキリと姫筋を食い込ませられてしまう。

少女浣腸を楽しんだ蚊人間の口がゆつくりと抜き出されると、リインは更なる地獄を味わわされる事になった。

変質怪人の狙い通り、大量の浣腸液によつて変身少女の媚肛は強烈な排泄欲に襲われ始める。

「はあうっ……お、お尻が……」

くるる……きゆるきゆくく……。

腸が扇動をして内部の液体をかき混ぜ、恥ずかしい活動音が周囲の敵にまで聞かれてしまう。内部からの強い力で肛門が押されると、少女はこれまでの人生で体験した事がない程の、強烈な排泄欲求を感じさせられていた。

「お腹苦しい……お尻いやあ……」

圧迫感で息が乱れ、細い全身は脂汗に覆われる。大きなタレ目は涙で潤み、赤い媚肛は

ぶんぶくと収縮をして、健気に決壊を防いでいる。

「お、お願い……トイレ……くはん……!」

敵に対して思わず助けを求めてしまう正義の妹少女。そんな羞恥姿は怪異たちにとって、この上ない淫楽の姿に映っていた。

「ここは廃工場だあ、ここをトイレだと思って、思いつきり出していいんだよお」

「無垢な少女の排泄姿……ワタシもぜひ観覧したいものですねえ」

「そんなはっ——あくぐく……っ!」

怪人たちは切迫少女の望みなど聞く耳を持たず、むしろ排泄姿を楽しむつもりだ。その間にも、腸の蠕動によって浣腸液は更に肛門に向かって押し下げられてゆく。媚肛への圧力は更に強まり、決壊の瞬間へと容赦なく追い詰められる正義の少女。

（おなか……くる、しいい……!）

恥ずかしい瞬間を少しでも遅らせようと、ヒザを内股に曲げて渾身の力で肛門を締める。意識の全てが肛門へと集中させられると息が詰まり、目の前の景色は焦点を失い、更に怪人たちの笑い声も遠退いてゆく。

「も、だめ……どうか……ト……レ、に……ひ」

しかしそんな末期的な努力など、数分と持つ筈もない。

目の前が数瞬で黒く包まれ、全身の力みが限界を突破させられる。自らの意志が自らの

肛門に無視されて、括約筋が力を失う。

「はひ、はひいっ——ゆ、ゆる、ひい……」

敵に対して無意識に助けを求めた瞬間、少女は遂に自らの肉体による、暴力的な程の排泄欲求に屈服させられた。その瞬間を、怪人たちの目の前で迎えさせられてしまう。

「……………あ……………」

最後の抵抗のように媚肛が縮まり、そして力尽きる肛門括約筋。

……ちよ、チョロロ……ぢゅびゃびゅうううううううっ！

短い排泄の直後、変身少女は肛門から放水のような排泄を披露させられた。

「いいいっ……いやあはっ——あはあつ、見ないでイヤああつ！」

催淫浣腸は体内の排泄物を完全浄化し、噴出させられる液体は体温で暖められた無味無臭な水に近い。色もクリアなスカイブルーだ。

それでも、他人に見られながらの排泄行為など年頃の少女にとって、死ぬよりも残酷な恥辱行為に違いはない。公然排泄という異常行為に、ラインの理性がへし折られてゆく。

しかも小柄な少女の恥排泄は、邪な怪異たちにとって極上の淫靡娯楽として楽しまれてしまう。

「ケケツケ、敵の前で出してやがるぜ」

「小柄な身体で、二メートル以上も飛ばしてますよ。フフフ」

「やめ、やふえてへ…やめてへっ——見ら、ひれえ……」

怪人たちの擲楡が耳に届き、少女戦士の心は更にねじ切られて押し潰されてゆく。今すぐ死んでしまいたい程の恥辱排泄。

それなのに。

「とまららひとつとまららひいっ——恥ずかし…はるかひい、ろりい……はあ、あくんん…おひり、はっいいいっ…！」

つびゆぢョびゆうウウうつ、びゆつぷちゆつビユるるうううつ！

限界以上に耐えさせられた排泄欲は決壊した途端、脳神経が痺れる程の異常快楽となつて、少女を呑み込んでいた。

目の前が白光する程の快感で意識が蕩かされ、背中もお尻も小刻みに震える。排泄刺激で媚孔を擦られて、肛門神経も全身の神経も、更に脳の中枢までもが、性神経へと確実に染め堕とされてゆく。

数十秒のも恥排泄が終えられると、体内の催淫浣腸液を全て出しきらされた黒髪変身少女の肉体は、伸ばされたヒザが震える程にまで力を奪い取られていた。

「あはう……はあ…はああ……」

排泄快感を味わわされた肛門は赤く染まって孔を開き、中の腸壁まで覗かせながらヒクリと痙攣をしている。

吐き出された催淫液体は小柄少女の身長よりも長い距離を飛び、裸のお尻から二メートル程先で暖かい水溜まりを作っていた。排泄恥池はホンノリと湯気をたてて、男を刺激する女体の甘い匂いまで芳香させている。

「正義のお嬢ちゃん、怪人の前でウ○コ垂れて、気持ちよかったですかあ？ ゲッハハ」
 「清純そうな幼い顔をして、なんとイヤらしい匂いの排泄をする少女なのか…フッフ」
 「……うろう……」

深く傷付けられた少女の心が、怪異の侮蔑で更に突き刺されて抉られる。羞恥で上気する愛顔には恥汗が流れ、潤む瞳は今にも涙が溢れそうになっていた。

激しく息つく少女の肛門が、変質カエルの舌で舐め回される。

ペロリ、つるり。

「はうっ——や、やめっ…あくんっ——はああ……」

「何とも美味しい身体じゃないか、ゲロゲゲ」

肛門から腸壁まで舐められたリインの身体は媚弱に痙攣をさせられながら、更に強い性熱で子宮を炙られてしまう。

（お、お腹の中が……）

怪異の性感で責められながら未だ達していない処女の子宮は、強い飢餓感を熱風船のように膨らまされている。その上、敏感な性神経にされてしまった肛門を舐められる恥ずか

に、我らの子をなあつ！　クッハッハッハ」

（こ、このままじゃ…怪物の子を…！！）

無理矢理身体を奪われて、更に強制妊娠させられる。愛する男性の子を宿す為の、女性にとつて最も大切な胎内に、醜く淫虐な怪物の子を宿らされてしまうのだ。

「いや…そんなのいやです…っ！」

少女の理性が恐怖で支配されてゆく。両掌拘束の開脚少女は逃れようと必死にもがくが、生体鎧の力を奪われた今の状態では抵抗にすらならない。

更に処女の変身少女は、目の前に敵怪異の勃起を見せつけられた。

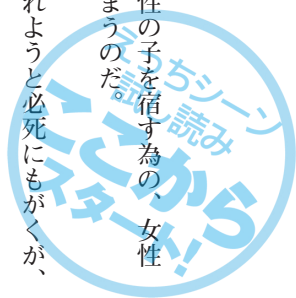
「きゃあっ…！！」

初めて間近に突きつけられた男性器は、とても人間の物ではない。天を向いて硬化するペニスは子供の手首程にも野太く、全体は幼虫のような節状起伏に覆われている。太細様々な血管にも覆われていて、先端割れ目の左右には赤い複眼まで備わっていた。

赤黒い本体はビクビクと脈打ち、欲深そうに淫液を垂らしている。

まさに女性が生理的に嫌悪する怪生殖器。こんなペニス押し込まれたら、どんな女性でも恐怖で発狂させられてしまうだろう。

コレまで怪異たちと闘ってきた少女戦士でも、これ程異常なペニスは見た事がなく、実物以上に巨大な凶器に感じさせられる。



ペニスの赤目がギラリと光ると、途端にリインの心は萎縮させられてしまった。

「——こ、来ないでえ……!!」

「そうだ……もつと嫌がれ、もつと恐がれ、裏切り者の妹め」

クワガタ怪異に両足首を掴まれて、ヒザを伸ばしたまま限界まで開脚させられる変身少女。汗浮く半裸の小柄肢体に怪物の巨体が覆い被されて、柔らかい姫粘膜に熱を持った異物を押しつけられた。

びとり……。

「ひっ——!! いいやつ、は離れて下さい……っ!!」

熱硬い異物を秘処に感じさせられると、強姦の絶望へと理性が追い詰められてゆく。

「まずはお前の処女を奪う」

熱い熱と薄い弾力に覆われた硬い勃起が、護るべき処女膣孔へと押し込まれ始めた。

つぶ……ちつぶ……。

「いきひ……やめてえ……ゆる、してえ……んはくう……っ!!」

先端の鈴割れを差し込まれて、太い肉傘を押し込まれ、肉土手の高いカリ部分で処女膣孔が押し拡げられてゆく。

無理矢理の拡張。怪異を受け入れさせられる為性感責めにされた身体でも、やはり狭い処女膣には鈍い痛みが走らされた。

「いっ——やめて……裂け……ちやう……っ！」

下半身から引き裂かれる想像が脳裏を過ぎり、少女戦士の心が恐怖だけで塗り潰されてゆく。そんな哀れな姿にさえも、邪な怪異たちは笑っていた。

「お前には我らの子を産ませるのだ、殺しはしない。それに催淫液を染み込ませたお前の孔は、何度犯そうが何人子を産ませようが、色も形も締めつけさえも、処女のままで」

それは完全に、怪異たちが少女の肉体を樂しむ為だけの肉体改造だ。

一生涯変わらないであろう処女のキツさを堪能しながら、怪人は更に腰を進めてくる。

「そん……んきひいっ——はいって……くるう……！」

つプちゅぷ……むちつぶゆうう……。

太い肉傘に通り抜けられると、膣孔を保護する為に女体は新たな恥蜜をこぼす。肉傘に通過された膣孔は再びキツく締められると、今度は肉傘よりもずっと熱い肉棒本体と接触をさせられる。

「あつ、いい……！」

処女膣孔がヒクリと戦慄く。怪異の男性器を更に数ミリ押し込められると、少女戦士の処女膜は怪人のペニスに触れられた。

「感じるぞ、ここがお前の処女膜だ」

「い、いや——んいい……っ！」

極薄い皮膜を熱弾力で押されると、リインの身体にも絞られるようなキツさを教えらる。犯される恐怖が目の前にまで押しつけられて、少女の白い肌が余す処なく脂汗に覆われてしまう。

黒髪を掴まれて顔を逸らせなくさせられて、更にペニスを進められる。純潔の証を限界まで押し伸ばされると、少女戦士はもう恐怖で哀願しかできなくされていた。

「ひきい……もう、許し、てえ……！」

恐怖と鈍痛で息ができず、瞳が潤んで景色がぼやける。

少女の視界でクワガタ怪異が赤目を光らせて邪笑みを浮かべる。そして――。

「お前は我らの子宮となるのだっ！」

「いっ——痛い痛い……っ！」

力強く腰を進めたクワガタ怪人によって、遂にリインの処女は奪われてしまった。鋭い痛みに少女の身体が一瞬硬直し、直後に全身からジワリと力が抜かれてゆく。

胎内からは絞られるようなキツさが消えて、ただ異物の存在感だけに支配される。

「悔しいか、裏切り者の妹め……クックック」

処女剥奪の怪異は笑いながら、更に怪人ペニスを押し込んできた。

つぶぢゅりゅむ……にゅぷちゅぷ……。

「はっはひっ——いや…出て、いってえ……」

肉詰めにもされる処女膣壁からは、愛液と一緒に破瓜の血が一筋流れ、皮膜を奪われたばかりの膣粘膜が太い肉傘で擦り上げられる。傷口をヤスリ掛けされるような激痛はしかし、瞬く間に遠退いていた。

「いた……く、なひい……どふ、してへ……?」

「もう痛みが消えたか…まさしく我らの子を産むに相応しい肉体よ」

催淫液で染められた神経は、痛みさえも性感に変える悪魔の淫液だった。押し込まれる熱ペニスの太さや深さまでもが、敏感に解らされてしまう。

更に密着する膣壁を肉擦りされながら、熱勃起先端で子宮入口を突つつかれた。

「ひはうっ……そんな…おく、までえ……」

自分でも信じられない程の深い場所で、怪異の勃起熱を教えられる。聖宮の入口を押され、更に今まで知らなかった男性器の熱と太さと堅さを膣全体に体験させられてしまうと、少女戦士の脳裏と子宮はこれまで以上の性感を感じさせられ始めた。

膣壁全てが新たな恥蜜を潤ませて、熱硬い男性器を真綿のような柔らかさで包み締める。子宮は更に強い飢餓感を覚えさせられ、脳神経全体には粘り着かれるような重い熱感を感じさせられ、自分の全てを内側から染めるような、淫性熱を浸透させられてくる。

(あそこが、あたまが…蕩け、るう…!)

強い官能に眉根が下げられ、自分の身体が自身の性熱で炙られる。

まるで自分の身体が淫女にされてしまったような感覚。それは処女の自慰だけでは決して知る事のできない、男性のみが与えてくれる女の性快感だった。

その喜びを、想いを寄せる義兄ではなく、卑劣な怪異によって強制体験させられてしまったリイン。少女の心に絶望の楔が打ち込まれて、容赦なく破壊されてゆく。

「こ、こんなの……いやあ……」

「いいぞ、もつと絶望しろ」

そして獲物少女の心を見透かしたクワガタ怪人の、射精に向けての抽送が開始された。
……ぢゅっぷぢゅう、つぶ又ゆりユぢゅぷぶにゅ…。

「ひきいっ……おなが、ぬか、れるう……!!」

太い勃起が膣孔まで抜かれた途端、内臓そのものが抜き出されるような錯覚をさせられた。熱責め子宮の飢餓感が強烈に性刺激をされてしまい、理性が圧迫される程の喪失感で脳裏が蝕まれてゆく。

更にギリギリまで抜かれた熱ペニスを奥深くまで押し込まれると、過敏な膣孔を広い肉傘と血管浮く本体で捌り上げられてしまい、下半身から背筋までが強い性感で蕩かされてしまう。

怪異のペニスで一往復されただけで、肢体は脳までが性感姦通されてしまい、意志も闘

志も理性も、熱湯を浴びせられたウエハースのように溶解されてゆく。

「ヘンに、なっちゅう……お願い、やめ、てえ……っ！」

戦士少女の哀願を当然無視し、強姦抽送の速度を一往復毎に上げてゆくクワガタ怪異。

つちゅぷつ、ヅゅぷぢゅつ…ちゅぷつ、ずぷぢゅつ、ちゅぷつヅゅぷぢゅちゅつ！

「やめ、はふうっ——そんなにひちゃあつ……んくっんくうん…っ！」

本格抽送が開始された途端、正義少女の抵抗声に幼い艶が含まれ始めた。肌が上気し、霧汗が浮き、乱れる息が深くなる。

突き上げられる肢体が腰から頭へと波打たされて、黒い髪がサラサラと揺れた。性熱の恥汗はあちこちで珠汗になって媚乳や恥丘の曲線を流れ、スベスベの肌は桜色に上気を魅せる。

そして犯される肢体は初めて教えられる性感に対し、戸惑いながらも確実に慣らされてゆく。犯される秘孔は恥蜜をこぼし、お尻の肌を伝って床にまで溢れる。

脳裏が性感で熱蕩けされて、既に呂律が廻らなくされた黒髪の妹少女。

「はあ、あはああつ……これ以上っ——あんっ…これイリヨウは、らめへっ…！」

一突き毎に子宮口が責められて、怪異の勃起が少しずつ、聖宮内部にまで押し込まれ始める。その度に胎内から背筋、手足の先へ、更に脳神経へと、性甘電が伝播されてゆく。

脳神経の中樞が抽送責めで淫色に染められて、考える力までもがペニス圧力で奪われて、

更に全身の力が一方的に抜かれてゆき、手足の先が重力感と熱感を失わされる。

正義の変身少女にはもう、闘うどころか怪異強姦から逃れる事すらもできなかった。犯される媚腔は強姦勃起を歓迎するように、様々な場所で締めつけ熱愛撫をして、敵である怪異に媚を売る。

「素直な肉だ、クッククック」

肉体が性感に屈服すると、クワガタ怪人は少女戦士を絶対の淫落墮に沈めるべく、更に強姦抽送の速度を上げた。

つぢゅつぷぢゅつぷつ、ぢゅぷ又ゅぷきゅちゅぷりゅうつ！

「はっ——あああああああつ……つ、つよひいつ、ふかひいいいい……つ！」

激しい突き上げで小柄な肢体はガクガクと揺すられて、童顔の黒髪が大きく靡く。波打つ肢体は力なく、ただ為す術もなく強姦の暴力に晒され続ける。感覚の喪失した手足は突かれるままに揺れらされて、性暴力に抗う事など不可能にされていた。

「もふ……タメえ……ヒキが……てき、なひ……！」

奥深くまで犯される度に全身の性神経が甘電させられ、心臓が早鐘を打たせられて肌全体が熱灼けにされる。

子宮の飢餓風船は限界まで膨らまされてしまい、背筋を伝って脳神経全体が性感漬けにされてゆく。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>